

アンドラゴジーの視点からみた 『ピアノの基礎』の実践的展開

生涯学習音楽指導員 三上香子

はじめに

筆者は、以前に趣味のピアノ学習者が満足するピアノ指導には、成人の特性を活かした教育学を提唱したマルカム・ノールズ(Knowles,M.S.)のアンドラゴジー (andragogy; 成人教育学) が適用できるのではないかという仮説をもとに研究を行った¹⁾。そこでは、成人のピアノ学習においては学習者を援助する方向をもつ指導が望ましいことが考えられた。また他方で、保育者養成校の学内専用メソッドである滝本裕造の『ピアノの基礎』についての研究を行った²⁾。そこでは、趣味の成人ピアノ学習者を対象とした『ピアノの基礎』の適用性を、今後の課題とした。現在アンドラゴジー論による具体的なピアノ教材研究は行われていない。これらの研究をふまえ、本稿では、アンドラゴジーの視点からみた『ピアノの基礎』の適用性を検討することにした。

1. マルカム・ノールズのアンドラゴジー論

マルカム・ノールズは、子どもと大人の学習者特性の違いに着目し、成人の学習体系を構築しようとしたアメリカの成人教育学者である。彼は、子どもを中心とした教育がペダゴジー (pedagogy) と呼ばれることに対して、大人の教育をアンドラゴジー (andragogy) と名づけた。Andragogy とは、ギリシャ語の aner (「成人」を意味する) と agogus (「指導」の意味) の造語である。さらにノールズは、アンドラゴジーを「成人を援助する技術 (art) と科学 (science) と定義した³⁾。ノールズの主な著書は、博士論文である 1962 年の『アメリカの社会教育』(The Adult Education Movement in the United States) , 1970 年初版の『成人教育の現代的実践』、(The Modern Practice of Adult Education: Pedagogy Versus Andragogy) および『成人学習者』(The Adult Learner) である。なかでも『成人学習者』は生前に 4 回、没後 3 回版を重ねている⁴⁾。なお、ノールズは、著書のなかでリンデマンの成人の学習の特徴をもとに、成人の学習について 5 つの柱をうちたてた。さらに晩年には、ノールズが第 6 の柱「知る必要性」を示したことから、現在のノールズのアンドラゴジーの柱は 6 つとなった。知る必要性とは、「成人は学習を開始する前に、なぜその学習をするのかを知る必要がある」というものである。これによって、成人教育の新しい定説のひとつは、学習援助者の最初の課題は、学習者が「学習の必要性」を自覚するようになることを手助

けすることだということになる、とノールズは述べている⁵⁾。次の図表1は、ノールズのこれらの考え方を表にしたものである。

図表1 ペダゴジーとアンドラゴジーの考え方の比較

	ペダゴジー	アンドラゴジー
自己概念	依存的	自己決定性の増大
学習者の経験	あまり価値がおかれぬ	学習のための豊かな資源である
学習へのレディネス	生物的発達・社会的プレッシャー	社会的役割の発達段階
学習への方向づけ	教科内容中心	問題領域中心
学習への動機づけ	外部からの賞罰	内的な誘因、好奇心
学習者の知る必要性	あまり必要ではない	必要である

マルカム・ノールズ『成人学習者とは何か：見過ごされてきた人たち』（堀薫夫・三輪建二監訳）鳳書房，2013年，p.144をもとに作成。

上記の表から、ノールズのアンドラゴジー論の中心は成人学習者の自己決定性にあることがうかがえる。さらにノールズは、成人の特性を活かした自発的な学習形態を、セルフ・ディレクティド・ラーニング（self-directed learning）と名づけ⁶⁾、成人の自発性を促すためには、成人を援助する方向での指導が望ましいとした。

そこで筆者は、「ピアノに向かう際は楽譜を一切見ない」という特徴をもつ滝本裕造の『ピアノの基礎』⁷⁾に着目した。楽譜にとらわれない指導法をもつ『ピアノの基礎』に、学習者の自己決定性を促す可能性があると推測したからである。

2. 『ピアノの基礎』について

(1) 『ピアノの基礎』の内容

『ピアノの基礎』は、1984年に滝本裕造（1932-2013）によって、大谷大学短期大学部幼児教育科（現：幼児教育保育科）の学生を対象に作成された、学内専用のピアノメソッドである。保育者養成校には、ピアノが不得手な学生が多少存在するが、滝本はそのような学生に対し、在学中に実際の保育現場で役立つ音楽能力（子どもの顔を見ながら歌唱指導をすること）の習得を目的とし、このメソッドを作成した。『ピアノの基礎』の特徴は、ピアノに向かう際は楽譜を一切見ないことである。これは、ブラインドタッチを中心とした一般のピアノ指導法とは大きく異なる点である。

『ピアノの基礎』は、全8章で構成されており、各章それぞれにウォーミングアップと呼ばれる数小節の運指練習と、日本でもよく知られているドイツ民謡を中心とした短い課題曲が掲載されている。滝本は、このメソッドの学習目的を達成するために「写譜」「暗

譜」「移調」の3つの柱を構築した。また、すべての曲に対し3つの柱をもとにした細かい練習方法と練習順序を示し、これらを厳守するように指導した。なお、この滝本のピアノ指導法は、刊行後30年以上たった現在でも学内で実践研究が継続されている⁸⁾。

(2) 先行研究と『ピアノの基礎』の共通点

成人のピアノ教材に関する先行研究では、橋本鈴枝が、「ある程度の年齢に達したピアノ学習者（趣味のピアノ学習者、保育者養成校の学生など）の場合は、ドを中心としたバイエル教本ではなく、効率的・かつ洗練された教材によるメソッドを提供する必要がある」とし、「Beginning Piano for Adult」（バスティンおとなのピアノ教本）の全調メソッドを例にあげた。全調メソッドとは、24のすべての調からなる練習曲を用いた練習方式をいう。橋本は、「成人は音に関する感覚や関節の柔らかさなどは加齢によってハンディを負うが、記号の理解や音楽を知的に理解する点では優れている」という生涯発達論をもとに、全調メソッドが組み込まれたバスティンの教材を、白鍵と黒鍵の数や位置を中心に分析した⁹⁾。古庵晶子は、1980年代から現在までの成人のピアノ学習の変遷と、それに伴って刊行された成人用ピアノ専門誌を渉猟した結果、シニア（50歳以上）のピアノ指導の実践におけるポイントとして、グループレッソンの効用、導入期における楽譜の不使用、音楽表現の重要性、学習者の意志の尊重の4つを示した¹⁰⁾。元吉ひろみは、ジェロゴジー（高齢者教育学）をもとにピアノ教材を熟考し、高齢者（60歳以上）に望ましい教材の条件として、楽しいと思える教材であること、エイジングに適合していること、達成感が感じられる教材であることの3つをあげている¹¹⁾。

『ピアノの基礎』には、これらの先行研究に示された成人にふさわしいピアノ教材に該当する点がみられる。まず、橋本の全調メソッドと相似的なものとして、「移調」があげられる¹²⁾。次に、古庵の導入期における楽譜の不使用については、「暗譜」が該当する。学習者の意志の尊重は、アンドラゴジー論に準ずる。さらに、元吉の楽しいと思える教材は、日本でもよく知られているドイツ民謡が使われていることが適合するであろう。エイジングに関しては、楽譜を見ずに練習する学習法が、やや視力のエイジング（老化）に関係するのではないかと思われた。なお、古庵のグループレッソンの効用と音楽表現の重要性と、元吉の達成感については、調査であきらかにされると予想された。

3. モニター教材の作成へ

(1) 学習目的の変更

このように、『ピアノの基礎』と、先行研究で示された、大人にふさわしいと思われるピアノ教材には、数々の共通点がみられた。しかし、保育者養成校の学生を対象に刊行された『ピアノの基礎』と成人のピアノ学習では、学習目的が異なる。そこで『ピアノの基礎』の学習目的を「音楽力をつけること」に変更した。音楽力とは、音楽を自分のものにして

自由に表現できる能力として、筆者が定義づけをした語である。この能力はピアノ以外の楽器演奏においてもうかがえるが、楽譜を見ずに練習をする学習法をピアニストの暗譜演奏に近い形態であるとし、ピアニストの表現力に焦点をあてて決定したものである。

(2) 教材の方向性の変更

次にアンドラゴジー論に基づき、『ピアノの基礎』の内容について、学習者の自己決定性を促し学習者主導型の方角への変更を試みた。主な変更点は、対象とする調を、ハ長調・ヘ長調・ト長調の3つに限定した。理由は、調号の数を参考にしたためである。また、演奏の負荷を考慮し、両手演奏は片手での演奏でも可とし、奏法の決定権は学習者にあるとした。さらに、『ピアノの基礎』では、使用する伴奏形が決められていたが、ここでは単音と和音の2種類を用意し、学習者がどちらかを自由に選択することができるように変更した。その他、歌唱や写譜においても、学習者の自由度の高い内容に変更した。表2の下線部がそれらに該当する。なお近年は、コード学習を希望する者が少なくない。また、コード学習は、演奏者が伴奏形を自由に選択できる特徴をもつことから、学習者の自己決定性を促す課題となる可能性が考えられた。そこで、ウォーミングアップにコード学習を追加した。

図表2 『ピアノの基礎』と変更後の（成人用ピアノの基礎）の内容の変更点

		ピアノの基礎	変更後
ウォーミングアップ		<ul style="list-style-type: none"> ・完全な暗譜演奏 ・指定された調のスケールとアルペジオ (4 va) ・両手が必須 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを弾きながら徐々に暗譜 ・ハ・ヘ・ト長調のみのスケールとアルペジオ (1 va) ・片手または両手のどちらでも可 ・コード学習
課題曲	写譜	<ul style="list-style-type: none"> ・記譜法に則った正しい写譜 ・指定された調への写譜 	<ul style="list-style-type: none"> ・写譜は本人がわかる程度でよい ・<u>原調以外の写譜は任意とする</u>
	暗譜	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞唱・階名唱は必須 ・暗譜してから弾く ・指定された伴奏形での練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞唱・階名唱は任意 ・ピアノを弾きながら徐々に暗譜 ・<u>伴奏形は自由選択</u>
	移調	<ul style="list-style-type: none"> ・全調 ・両手奏 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハ・ヘ・ト長調のみ ・片手奏または特定の調だけでもよい

最後に、これらの変更点をもとに、調査用モニター教材と5回分の指導カリキュラムを作成した。課題曲にきらきらぼしを採用した理由は、よく知られた曲であること、単純三部形式なので、写譜しやすいこと、暗譜が容易であることの3つである。下記の図表3-

1 から 3 は、モニター教材のウォーミングアップと、写譜および暗譜用の課題曲の図と¹³⁾、指導カリキュラム表である。

ウォーミングアップ

スケールとコード

ハ長調: C

ト長調: G

ヘ長調: F

ハ長調に出てくるコード ト長調に出てくるコード ヘ長調に出てくるコード

C F G G7 G C D D7 F B \flat C C7

MIKANPIANO

きらきらぼし

自分で作る楽譜①C

A

B

「Aのかえし」

「Aのかえし」

MIKANPIANO

図表3-1 ウォーミングアップ

図表3-2 課題曲(ハ長調)

図表3-3 指導カリキュラム

回	ウォーミングアップ	課題曲	内容	指導のポイント	宿題
1	ハ長調のスケール ハ長調の基本コード	ハ長調	写譜・視唱・右手	・音の高さに間違いはないか ・伴奏形を決める(単音・和音)	両手
2	ト長調のスケール ト長調の基本コード	ハ長調 ト長調	両手 写譜・視唱・右手	・すらすら弾けているか ・音の高さに間違いはないか	暗譜 両手
3	ヘ長調のスケール ヘ長調の基本コード	ハ長調 ト長調 ヘ長調	暗譜 両手 写譜・視唱・右手	・止まらずに弾けているか ・すらすら弾けているか ・音の高さに間違いはないか	暗譜 暗譜 両手
4	すべてのスケール すべての基本コード	ハ長調 ト長調 ヘ長調	暗譜 暗譜 両手	・止まらずに弾けているか ・止まらずに弾けているか ・すらすら弾けているか	暗譜 暗譜 暗譜
5	すべてのスケール すべての基本コード	課題曲を3つの調に移調しながら暗譜演奏する			

4. 調査方法と調査協力者

調査は、筆者と生涯学習音楽指導員と知人の自宅ピアノ指導者の計8名が、成人のピアノ学習者を対象に実際にモニター教材を使った指導を行う介入調査法である。調査期間は、2015年1月から約半年間であり、生涯学習音楽指導員には、グルーブレッスンの様子を動画で報告してもらい、自宅ピアノ指導者には、学習者の様子や発言、指導者の感想などを調査票に記載して提出してもらった。調査協力者は、カルチャーセンター、公民館でのグルーブレッスン学習者18名と、指導者宅の個人レッスン学習者24名の合計42名であった。次の図表4は、調査協力者の内訳である。

図表4 調査協力者の内訳 ※()内は人数

	男性	女性	計
グルーブレッスン	なし	30代(1)、60代(17)	18名
個人レッスン	40代(1) 70代(1)	20代(1)、40代(3) 50代(6) 60代(11) 70代(3)	24名

合計 42名

調査協力者の共通点は、成人であること、両手でやっとなら弾けるレベルであること、定期的にピアノ指導をうけていることの3つである。なお、指導者には、指導カリキュラムはあくまでめやすであり、実際の指導は、学習者の進捗状況や教室の稼働スケジュールに合わせて柔軟に対応すること、学習者と指導者が常にお互いに話しやすい雰囲気の中で調査を行うよう心がけることの2つを留意点とした。

5. 調査結果

(1) 学習者の調査結果

グルーブレッスンでの調査では、学習者が意欲的に課題に取り組み、上達していく様子が見られた。例えばカルチャーセンターでは、ウォーミングアップの運指練習を「脳トレ」と言い、机を並べて写譜する様子を学校にたとえたり、「孫の前で楽譜を見ずに移調奏を披露したところ賞賛された」というエピソードが語られたりした。また、調査終了時には、受講者全員から「もっとやってみたい」という発言が得られた。公民館では、生涯学習音楽指導員の合図に合わせてウォーミングアップのスケールがテンポよく演奏され、課題曲の移調もテキスト通りにスムーズに行われている様子がみられた。

個人レッスンの調査では、グルーブレッスンよりも活発な発言がみられた。また、「写譜」「暗譜」「移調」のすべての項目で「脳トレ」という発言がうかがわれた。

例えば、ウォーミングアップの項目では、モニター調査であることと、教材の内容を伝えていることから、「やることわかっていると取り組みやすい」という発言が示された。

写譜の項目では、「曲の様式の理解に役立つ」という発言があった。これは、滝本が設定した写譜の学習目標に準じる。他方、写譜を嫌い、これを行わなかった学習者も存在した（学習者 a）。暗譜の項目では、楽譜を覚えることへの不安を表わす発言が多くうかがわれた。しかし、練習を重ねていくうちに、間違いを自分からすすんで修正する様子がみられ、止まらずに演奏できた時は「楽譜を見ずに弾けた」と、課題の達成を喜ぶ様子がみられた。移調の項目では、ほとんどの学習者が必ずしもすらすらと演奏はできたわけではなかった。しかし、調性が異なると曲の雰囲気に変化することに驚いた表情や、興味を示す様子がみられた。なお写譜を嫌がった学習者 a からは、「ト長調が好き」と調性を感じる発言と、調査終了時に「他の曲も弾きたい（他の課題曲でも滝本式学習法で弾いてみたい）」という発言があった。次の図表 5 はこれらの学習者の発言を表にしたものである。なお、個人レッスンでは、指定された課題を、すべて両手で演奏することができた調査協力者や、課題の途中までを片手で演奏して調査を完了した調査協力者が報告されたことから、調査協力者の進捗状況には差がみられた。

図表 5 学習者の発言の抜粋

		グループレッスン	個人レッスン
ウォーミングアップ		<ul style="list-style-type: none"> 基本的なことは必要だ <u>「脳トレ」</u> ですね 	<ul style="list-style-type: none"> <u>やる</u> ことがわかっていると取り組みやすい こういうことをやりたかった コードが難しい
課題曲	写譜	<ul style="list-style-type: none"> 曲の仕組みがわかった とても新鮮だ 学校に来ているみたい 	<ul style="list-style-type: none"> 写譜をしたら曲の作りがよくわかった <u>写譜はやりたくない</u>（学習者 a） <u>「脳トレ」</u> ですね！楽しい
	暗譜	<ul style="list-style-type: none"> 暗譜をすると上手くなりそう 記憶力に自信がない 	<ul style="list-style-type: none"> こういうことをやっておかないとだめだと思う 暗記力に自信がない <u>「脳トレ」</u> ですね
	移調	<ul style="list-style-type: none"> 賢くなった気がする 孫に「すごい」と言われた 	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な移調の知識はあったほうがいい <u>ト長調が好き</u>（学習者 a） <u>「脳トレ」</u> になって嬉しい
終了時の感想		<ul style="list-style-type: none"> もっとやってみたい 	<ul style="list-style-type: none"> 指番号だけを見て弾く練習は、運動のようで楽しくないから、この楽譜はよい もっと色々なジャンルの曲があると楽しい <u>他の曲も弾きたい</u>（学習者 a）

(2) 指導者の感想

指導者からは、このようなメソッドをぜひ使ってみたいという感想とともに、「コードがわかりにくい」という調査協力者の発言から、コードをわかりやすく説明するための、コード指導法のさらなる研究、読譜力の訓練のために、ウォーミングアップのみブラインド

タッチにすること、低音部の読譜が苦手な学習者のために、低音部の写譜を充実させること、移調を円滑に行うために、指使いを徹底することの4つの改良点が示された。

6. 調査結果に対する考察

(1) 先行研究と調査結果の考察

一般的なピアノ個人レッスンでは、学習者のニーズに応じた課題を中心に指導が行われる。このことから「写譜はやりたくない」という学習者 a の発言は想定内であった。それよりも1対1のプライベートな指導においてこのような発言が可能であったということは、調査の留意点どおりに、学習者が発言しやすい環境のなかで調査が行われた結果であると思われた。他方グループレッスンでは、モニター教材のカリキュラムどおりに課題がこなされ、学習者の進捗にも大きな差が見られなかった。この理由のひとつとして、グループレッスンでは通常的にテキスト学習を中心とした指導が行われていることが考えられる。また、グループレッスンの参加者は、自分だけが弾けないことを恥ずかしく思うことから、個人レッスン学習者に比べて自宅練習をより熱心にすることも考えられる。このような個人レッスンとグループレッスンの比較から、古庵のいうグループレッスンの効用が示されたと思われる。

次に、調査協力者の発言から、成人は写譜により曲の構成を知ることにより喜びを感じ、移調により調性の違いに気づく感性をもつ可能性が示された。このことは、技術面ばかりに目をむけられがちなピアノ学習に対し、成人が別の音楽的価値を見出す可能性を示していると考えられる。これは、成人用『ピアノの基礎』の学習目的である「音楽力を身につけること」に等しく、また古庵のいう音楽表現の重要性に結びつく内容になりうると思われる。

さらに、グループレッスンと個人レッスンともに、学習者からは練習課題が達成された喜びを表す発言が多くみられた。このことから、元吉のいう達成感についても示されたと考えられる。したがって、先行研究で示されていた未確認の部分は、調査であるていどあきらかにされたと考えられた。

(2) アンドラゴジー論と調査結果の考察

ウォーミングアップの項目では、「やることがわかっていると取り組みやすい」という発言があった。この発言は、ノールズが6つめの成人の特性としてあげた「知る必要性」と合致している。ノールズは、学習援助者の最初の課題は、学習者が「学習の必要性」を自覚するようになることを手助けすることだ、と述べている。このことから、成人のピアノ指導においては、学習の目標をあらかじめ明確に示す必要があると考えられた。

また、「脳トレ」という発言が頻繁になされたが、ピアノの場合のトレーニングとは、一般的には運指訓練を中心としたテキスト学習をいう。筆者の過去の調査においてこのよう

な運指訓練は、成人が好まない学習課題であった¹⁴⁾。また、図表1で示したように、ノールズのアンドラゴジー論においても成人の学習の特性は、問題領域中心であると述べてられている。しかし本調査では、成人学習者が意欲的に課題に取り組む様子がみられた。この結果から、アンドラゴジー論をもとにした教材を用いるならば、成人のテキスト学習も可能であることが示唆されたと思われる。

7. 『ピアノの基礎』の、成人のピアノ初心者への適用の可能性

調査結果から、『ピアノの基礎』を成人のピアノ初心者の指導に適用させるためには、「学習目標を変更すること」、成人が練習しやすいように調性や使用する音階の数などの「内容の見直しを行うこと」、学習者自身が練習内容を選択できるように、「学習者主体の教材に方向転換すること」に伴い、「指導者が学習者を援助する方向での指導を行うこと」の4点の改善点があきらかになった。この調査をもとに滝本式ピアノ指導法の成人むけ教材を作成し、それを使った成人のピアノ指導が行われると仮定したならば、それは、単なる成人むけピアノ教本というだけでなく、アンドラゴジー論に基づいた脳トレーニングという新しい分野のもとで再構築される可能性が示唆されると考えられる。

しかしこの可能性は、あくまで部分的なものでしかない。なぜなら本研究は、学習者の表面的な発言を中心に行われており、学習者や指導者の心的内面にはあまり触れられていないからである。したがって現時点では「成人用『ピアノの基礎』を用いたアンドラゴジー論の実践」という今後の課題が示されたといったほうがよいのかもしれない。

-
- 1) 三上香子・堀薫夫「アンドラゴジーの視点からみた成人のピアノ教育における学習指導に関する研究『音楽学習学会編』、第10巻、2014年、49-60。
 - 2) 三上香子「滝本裕造のピアノの基礎について」(公財)音楽文化創造編、『音楽文化の創造』、第75号、2016年、32-35。
 - 3) マルカム・ノールズ『成人教育の現代的実践：ペダゴジーからアンドラゴジーへ』(堀薫夫・三輪建二監訳) 鳳書房、2002年、p. 38。
 - 4) マルカム・ノールズ『成人学習者とは何か：見過ごされてきた人たち』(堀薫夫・三輪建二監訳) 鳳書房、2013年、p. 321。
 - 5) 同書、p. 71。
 - 6) 堀薫夫『生涯発達と生涯学習』ミネルヴァ書房、2010年、p. 128。
 - 7) 滝本裕造『ピアノの基礎』一木楽器、1984年。
 - 8) 『ピアノの基礎』の詳細は、前掲2を参照。
 - 9) 橋本鈴枝「成人(初心者)のためのピアノ教程についての考察」『横浜国立大学教育紀要』第2巻1985年、1-25。
 - 10) 古庵晶子「日本におけるシニアのピアノ学習研究について」『音楽表現学』第6巻、2008年、65-74。
 - 11) 元吉ひろみ「高齢者のためのピアノ教材開発(1) 学習者の学びの特徴に着目して」『教材学研究』第16巻、2005年、143-148。
 - 12) 全調は通常は24調をさすが、『ピアノの基礎』では長調のみを扱っているため移調の対象は12調である。
 - 13) 写譜用の課題曲は、この他にト長調とヘ長調を準備した。
 - 14) 前掲書1、表1。